

イザヤ書 60：1～3

ルカによる福音書 22：47～53

「ユダの裏切り」

【前奏】

【招詞】詩編 34：6～9

【祈祷】司式長老

【聖書】イザヤ書 60：1～3、ルカによる福音書 22：47～53

【説教】「ユダの裏切り」

<ユダの存在>

今日はユダの裏切りの場面です。ユダの存在。これは、いつもわたしたちに何か引っ掛かりを与えるように思います。

どうしてこんな裏切り者が、イエスさまの十二弟子に選ばれていたのでしょうか。イエスさまは人選に失敗したのでしょうか。ユダがどんな人物かが分からなかったのでしょうか。ユダはどうして、イエスさまを裏切ったのでしょうか。

22章3節にはこのように語られていました。「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。」

サタンとは、人を神さまから引き離し、神さまを疑わせたり、救いの恵みを疑わせたりして、わたしたちを罪へと誘う力のことです。

聖書によれば、ユダは、サタンによってイエスさまを裏切ったのです。その理由は、詳しく語られていません。しかし、ユダはサタンの力に負けて、神さまの思いではなく、自分の思いに従い、神さまの計画よりも、人間の計画の方がより良いと信じ、イエスさまを、神さまの御子を、裏切ってしまったのです。

しかしこれは、ユダが特別に弱い人間だったとか、極悪非道な性格であったとか、十二弟子の中で異色の存在だった、ということではありません。わたしたちは、どうしてもユダのことを、毛嫌いしてしまいます。悪い意味で、特別視してしまいます。

でも前回の聖書箇所では、イエスさまが弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と命じられたのに、弟子たちが全員祈のをやめて、眠り込んでしまっていたことが語られていました。弟子たちはみんな、誘惑に勝てない者たちだったのです。

誘惑と戦うには、サタンの力に対抗するには、信仰の戦いに備えるには、「祈り」が何よりも必要です。祈りとは、神さまとの対話であり、神さまと共に生きることであり、神さまに依り頼み、神さまの御心を見つめることだからです。祈りなしに、本来、人は生きることが出来ません。人間は、自分でサタンや誘惑に対抗できる力を持っていません。

しかし、ユダ以外の弟子たちもまた、誰一人、祈り続けることが出来なかった。神さまを見つめ続けることが出来なかった。誘惑に、サタンに、打ち勝つことが出来なかったのです。

そのことは、このユダの裏切りの場面の後、来週お読みする聖書箇所ですが、一番弟子であったペトロまでが、イエスさまのことを三回も知らないといった場面で、更にはっきりと、明らかになります。

ペトロは以前、牢に入ることになっても、死ぬことになっても、イエスさまに最後まで従い抜く覚悟がある、と言い張ったことがあります。

しかし信仰は、自分の覚悟や、決意や、努力や、力で、守り抜いたり、歩み通すことが出来るものではないのです。信仰とは、神さまに信頼すること、そのものです。自分の弱さを認めて、ひたすら神さまの力に依り頼むことが、まことの信仰の歩みなのです。

ところが、一番弟子で、自信満々だったペトロもまた、結局は神さまにではなく、自分の力に依り頼んでいた。サタンのふるいにかけていたら、簡単になくなってしまふ、偽物の信仰だった。そのことが明らかにされるのです。

ここには、眠り込んだ弟子たちを通して、裏切ったユダを通して、またイエスさまを知らないと言ったペトロを通して、サタンの力の前に、誘惑の前に、闇の力の前に、弱く、脆く、罪深い人間の姿が曝け出されています。

そしてこの姿は、わたしたちの姿でもあるのです。ユダの出来事は、他人事ではありません。ユダは悪い奴だと、弟子たちは弱い人たちだと、傍から眺めている場合ではありません。

わたしたちもまた、いつも誘惑に晒され、サタンのふるいにかけてられ、危機的な状況にあるにも関わらず、自分の思いに捉われ、祈ることをやめ、神さまを忘れ、眠り込んでいる者なのです。誰一人例外なく、サタンの力に対抗できない、弱い、小さい、罪深い者なのです。

<イエスさまの選び>

しかし一方で、この事実によって明らかになることがあります。それは、イエスさまがこの十二人を選ばれたのは、明らかに弟子たちの資質や、人間性や、従順さによるのではない、ということなのです。

イエスさまは、ご自分の救いに与らせ、恵みを受けさせ、命を与え、そして神さまのご計画のために用いようとされる人物を、素直だからとか、従順だからとか、立派だからとか、優秀だからとか、そのような人間側の理由には一切よらずに、選ばれたのです。

それはただ、イエスさまの主権によって、イエスさまの一方的な意志によって、まったく一方的な恵みによって、弟子たち一人一人が選ばれたのです。

ユダもそうです。イエスさまは、もちろんその弱さや、愚かさや、罪深さも、よくご存じだったに違いありません。でも、ユダを罪から救いかった。ユダと共に歩みたかった。ユダに恵みを与えたかった。そのような、ただイエスさま側だけの理由によって、ユダも、また他の弟子たちも選ばれたのです。

そうであるならば、罪深いユダが、イエスさまに選ばれた十二弟子の一人であったことは、むしろわたしたちにとっては、ある意味で良い知らせなのかも知れません。

それは、裏切るような者でも、どれだけ罪深い者でも、イエスさまは選んで下さるのだということ。どのような者でも、救いに与らせたいと願っておられるということ。どのような者でも、イエスさまはただ恵みによって、イエスさまご自身の一方的な愛によって、ご自分の御許に招いて下さるとのことなのです。

しかしもちろん、弟子たち、わたしたちが、弱いと分かっているから、罪深いと知っているからと言って、イエスさまを裏切っても仕方がない、神さまに背いても仕方がない、ということでは、決してありません。

イエスさまは、わたしに従いなさい、と言われたのです。立って祈りなさい、と命じられたのです。神さまにお委ねし、依り頼み、救いを求めなさい、と教えてこられたのです。そして、弟子たちの信仰が無くならないようにと、ずっと祈ってこられたのです。

そのような中でのユダの裏切りは、イエスさまにとって、どれほど悲しく、辛いものだったのでしょうか。眠り込んだ弟子たちの姿は。イエスさまのことを「知らない」と繰り返すペトロの姿は。イエスさまにとって、どれほどの苦しみ、どれほどの痛み、どれほどの悲しみだったのでしょうか。

しかし、人はどうしようもなく、このようなサタンの力に、誘惑に、闇の力に、捕らわれてしまうことがあるのです。

<闇の支配>

[ユダ]

今日の聖書の場面は、その闇の力が、人々を支配している様子が描かれています。

まず 47 節には、ユダが群衆と共に現れて、イエスさまに接吻をしようとして近付いた、とありました。接吻とは、当時は信頼し合う者同士が交わす親しい挨拶です。「接吻」と訳された言葉は、「愛」という言葉が元になっており、互いの親愛の情を表す行為なのです。

ユダは、そのように愛を示す行為によって、イエスさまを裏切りました。

[他の弟子たち]

そして、49 節には「イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、『主よ、剣で切りつけましょうか』と言った」とあります。周りにいた人々、つまり他の弟子たちのことですが、彼らは剣を手にしていました。

剣は、弟子たちが、神さまに依り頼むことや、祈ることによるのではなく、自分の覚悟や、自分の力で戦おうとしていることの象徴です。人間がこのようにして、自分の力で自分を守ろうとする時、それは武器を手にとることしか、相手を傷つけることによってしか、守ったり戦ったりすることが出来ないのです。

そのような弟子たちが、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言って、一人が返事を待たずに大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした、とあります。恐らく、ほとんど衝動的に攻撃をしたのでしょう。恐ろしかったからに違いありません。

このすぐ後で、押し寄せて来たユダヤ人の指導者である祭司長、神殿守衛長、長老たちが、剣や棒を持っていたことが語られています。

向こうは群衆も一緒に来たのですから、弟子たちからすれば武器をもった集団相手に、多勢に無勢だったのです。その手下の一人に、二振りしかない剣で打ちかかっても勝ちようがありません。しかし、剣を振り回さずにはいられなかった。これが、恐れに取りつかれ、自分の力で戦おうとする者の振る舞いです。

[ユダヤ人指導者と群衆]

そして、52節以下にはこうあります。「それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。』」

イエスさまお一人を捕らえるために、まるで強盗にでも向かうように、大勢で手に剣や棒を持って、ユダヤ人の指導者たちと人々が押し寄せて来ました。

この時イエスさまは、「毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった」と言われました。

ユダヤ人の指導者たちは、これまでもずっとイエスさまを殺したいと願っていましたが、今日の日まで手出しが出来なかったのです。イエスさまは毎日、多くの民衆に神殿の境内で御言葉を語っておられました。たぶんチャンスはあったのです。しかし、多くの民衆がイエスさまを歓迎していたので、イエスさまに手を出したら民衆がどういう反応をするか分からず、民衆を「恐れて」手が出せませんでした。

ここにも、神さまの眼差しよりも、人の目、民衆の目を恐れる、闇に捕らわれた者の姿があります。

そして、とうとうイエスさまを捕らえるチャンスがやって来たこの時も、彼らは、やはり武器を携えずにはいられなかった。戦うためのもの、自分を守るもの、相手を攻撃するものを、手にせずにはいられなかった。ここでもやはり、人々を「恐れ」が支配していました。

[闇の力、恐れ]

今日の場面全体を覆っているのは、人々の「恐れ」です。それは、自分を傷つけられるかも知れない、自分を守らなければならない、自分で戦わなければならない。そのような思いの中で、愛を信じることの出来ない、神さまの御心を知ろうとしない、祈りによって戦おうとしない、闇の力に支配された人々の姿です。

闇の力の底には、死が、滅びがあります。この恐れに取りつかれた弟子たち、ユダヤ人指導者、群衆の姿は、互いに恐れ合い、攻撃し合い、傷つけ合い、滅びへと向かっていく、すべての人々の姿、わたしたち人間の罪の姿なのです。まさに、それぞれの思いを成し遂げようとして、神さまの思いに逆らい、人を傷つけていく、すべての罪人の姿なのです。

<光>

しかし、ここでただお一人、闇の力に支配されないお方がおられます。ただお一人、神さまの御心に最後まで従おうとしておられる方がおられます。それが、イエスさまです。

イエスさまは、「今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている」と言われました。わたしたちの上には、闇の力が多いかぶさります。闇にあっけなく支配されてしまいます。

しかしイエスさまは、まことの支配者はただ神さまのみであることをご存知です。人の計画ではなく、サタンの計画ではなく、神さまのご計画こそが実現することをご存知です。

イエスさまは、ひたすら神さまの御心に従われます。祈りをもって、「わたしの願いではなく、御心のままに行なってください」との祈りによって、闇の力と戦われます。

イエスさまは、逆らう者、攻撃する者、裏切る者を、剣を取って力で追い払ったり、一掃したり、滅ぼしたりはなさいませんでした。そうであるならば、今ここにわたしたちも、どうに滅ぼされているでしょう。

しかしイエスさまは、力によらず、祈りによって。傷つけることではなく、癒すことによって。攻撃することではなく、すべてを受け入れることによって。そのような仕方で、闇の力と戦われたのです。

祈りを通して、神さまに従い抜くことで。神さまにすべてを委ねきること。唯一このお方だけが、人を支配する闇の力と、戦い抜くことがお出来になったのです。

この戦いは、最後、十字架の死によって、イエスさまが勝利を治められました。神さまに従順に従い抜き、神さまの御手にすべてを委ね、闇の力に支配された人々のすべての罪をその身に引き受けられることによって、イエスさまは闇の力に、サタンの力に、罪の力に、勝利して下さったのです。

人の目には、十字架に架けられ、無抵抗のままで死んでいったイエスさまは、闇の力にすっかり敗北したように映るかも知れません。人間の罪深い計画こそが、そこで実現したように見えたかも知れません。

しかし、そうではないのです。父なる神さまの御心に従い、すべての人の罪を引き受けられ、苦難を受けて死に至るまで従順に歩み通されたイエスさまこそ、闇の力に、罪の力に、滅びの力に、まことに勝利なさったのです。

そのゆえに父なる神さまは、イエスさまを死者の中から復活させ、すべての栄光と力をお与えになり、この方がまことの勝利者であること。わたしたちの罪の贖いを成し遂げられたこと。死を滅ぼし、永遠の命と復活を与える方であることを、明らかにして下さったのです。

これこそ、神さまのわたしたちを救うためのご計画の実現です。まさに神さまの御心の通りに、イエスさまがすべての御業を成し遂げられたのです。

このイエスさまの許にこそ、闇に支配されたわたしたちを照らす、唯一の光があります。この方だけが、わたしたちを闇の力から、罪の力から、滅びから、解放して下さることがお出来になります。今日のイザヤ書 60：1～3 の箇所はまさに、そのことを示しています。

「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があなたの上に現れる。国々はあなたを照らす光に向かい／王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。」

闇が地を覆い、暗黒が国々を包んでいるような、わたしたちの現実の世界です。

しかし、わたしたちには、この闇を照らすことがお出来になる、まことの光、イエスさまが与えられています。イエスさまの光が、わたしたちの上に輝いています。

わたしたちは、自分の力では、闇の力に、罪の力に、サタンに、誘惑に、勝利することは出来ません。わたしたちは、自分の弱さを甘く見てはいけません。わたしたちは、まったく対抗できる力を持っていないし、覚悟や決意などは、簡単に吹き飛んでいきます。

ですから、わたしたちは、立って祈ることしか。すべてに勝利なさったイエスさまの御許に立って、神さまに救いを求めることしか、戦うことは出来ないのです。

しかし、すでに、すべてに勝利なさったイエスさまの御許に立つならば。この方が共にいて下さるならば。わたしたちは、祈る力が与えられ、信じる心が与えられ、神さまの勝利の御手の中に、自分が置かれていると知ることが出来るのです。

そして、わたしたちもまた、イエスさまにあって、神さまの御心に従う者となっていくことが出来るのです。神さまを愛し、隣人を自分のように愛すること。この神さまの御心を知る者となり、神さまが望まれることを行なう者とされていくのです。

わたしたちもまた、剣を取るのではなく、祈りによって。切りつけるのではなく、癒しによって。戦うのではなく、受け入れることによって。互いに滅ぼし合うのではなく、イエスさまの御許で、共に生き、共に歩いていくことによって、光の中を歩む者となることが出来るのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

闇の力に支配されているわたしたちを、イエスさまの救いの光で照らして下さったこと。そして、十字架と復活のイエスさまの勝利に、共に与る者として、ただ恵みによって、わたしたちを御許に招いて下さることを感謝いたします。

どうか、イエスさまが共にいて下さることによって。目覚めて祈ることによって。神さまに委ね、依り頼むことによって。信仰の道を、歩み通していくことができますように。

そして、イエスさまの光を受けて、わたしたちもまた、世の光として歩むことができますように。あなたの御心を世の人々に伝える者とならせて下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 5 3 1 「主イエスこそわが望み」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 2 4 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン